

草津宿歴史ぎやらりい vol. 15

江戸時代のお金～寛永通宝～

時代劇などを見ていると小判を25枚紙で包んだ「切り餅」を4×5列、2段に並べた千両箱が登場します。小判1枚は、現在のお金に換算すると60,000円から100,000円程度と考えられていますが、こうした小判ばかりでは日常生活では使いづらく、庶民の間で流通していたのが、テレビドラマ「銭形平次」が投げる貨幣「寛永通宝」です。これは、寛永3年（1626）に、水戸の佐藤新助によって造られたのが始まりで、幕末まで鑄造、流通しました。通用した時期が長いため、その種類は数百種類にも及びます。現在では寛文8年（1668）に文銭が鑄造される以前のものを古寛永銭、寛文8年以降に鑄造されたものを新寛永銭といいます。新寛永銭は、背（裏側）に波型文様のあるひとまわり大きい4文として通用とするもの、そのほか1文として通用するもので、銅や鉄で鑄造されました。

旧草津宿内の寺院から数多く「寛永通宝」が確認されました。恐らく賽銭として投じられたものだと思いますが、古寛永や新寛永銭の4文銭、文銭など幾種類ものが含まれています。

古寛永銭のなかでも、よく見ると「寛永通宝」の文字が異なり、これは江戸の芝や浅草、大津の坂本など、鑄造された^{銭座}の違いによるものです。また新寛永銭の4文銭でも、背の波型文様が21波のものと11波のものがあります。文銭でも、「寛」の文字の最後の跳ねが虎の尾のようになったものや、寛永通宝の文字が長いもの、また背に「文」「元」「小」などの文字が入ったものも見られます。

(2012年7月)



古寛永銭



4文銭 11波

21波(右)



新寛永銭 1文銭 「元」「小」「文」の文字がみえる